

朝をひらく

「お父さん、これ誕生日のプレゼント」。開けてみるとビックリ、額に入った私の遺影であった。

「お父さんの葬式用に使って、これで安心やね」と、悪びれもない顔で娘は言う。複雑な気持ちであった。まだ還暦を過ぎたばかりの父親の、葬式のことを考えていたとは！

今までに職業柄、数多くの遺影を見てきた。でも、そのほとんどがピンボケや、不自然な形で切り取られたものである。これはいいところに目をつけたものだ。さすがお寺で生まれ育った娘

素の顔写真

永田 円了
真国寺住職



だ！と、ヒザを打って娘を褒めた。

それを機に、娘夫婦は副業として「素顔の生前遺影」を撮るようになった。コンピュータの画面に並んだ編集前の写真を見て驚かされる。被写体が一人の人物であるにもかかわらず、100人の違った人たちがいるかのようになり、一枚一枚が全て違うのである。つくり笑いの顔、控えめの顔、虚勢をかけた顔。でも不思議なことに1

00枚目ぐらいには、その人の素の表情が一枚ぐらいいは写し出されている。

「何か心のレントゲンを覗いてみたい」と娘は言う。なるほど、医者は内臓の写真を撮って身体の状態を見る。顔写真はその人の心をチェックするものなのか。100枚取ると、その人の100通りの、人生に向かう意識の表情が表裏出される。そのうちの一枚は、本人でも気付かない、もう一人の自分の姿。「ええっ、こんな自分がいたのか」と畏怖と敬意をもって迎えられる「いのち」の姿が出現する。

絵本「100万回生きたねこ」(佐野洋子著、講談社)では、主人公のとらねこは、100万回死

んで100万回生きる。しかし、一度も泣いたことがなかった。本来の自分を生きてこなかったからである。でも最後には最愛の白猫が死んで初めて泣く、100万回泣き続ける。それ以後二度と生き返ることはなかった、というストーリーである。

本当の自分を見つげるために、かくも多くの生き方を試行錯誤しなければ人生は完結しないのか。人生は一度、そんなに何度も生きられはしない。でも大丈夫である。生前遺影撮影では100万回ならずとも、100回程度の人生を超高速度デジタルで再現できる。その中に、一枚は真の自分、楽屋裏で出番を待ち続けていた自身の「いのち」を見つげることができ

る。最後の晴れ舞台にふさわしい一枚の遺影が、とっておきのあなたの今を照らし出す。

「いのち」の姿が出現